

道路整備と架橋



* 行政資料60企画302「グラフやまぐち1969.1」。
建設工事が進む上関大橋（左）と関門橋・笠戸大橋完成予想図（右）。



解説

高度経済成長期には道路をはじめとする身近なインフラが次々に整備されました。

写真は1969（昭和44）年1月発行の山口県の広報紙「グラフやまぐち」で、年頭の橋本県知事のインタビュー記事や、「繁栄への道を開く」「海の五橋」の見出しで、道路および橋の建設の様子が紹介されています。

道路整備では、この時期、山陽と山陰を結ぶ道路（陰陽連絡道路）の建設に力が注がれました。昭和37年に小郡―萩間が完成し、下関―長門間をはじめ5つのルートが完成間近であると書かれています。豊北―周東間の縦貫道路、国道2号線の渋滞緩和のためのバイパス、高速道路網の整備計画も示されています。

三方を海に囲まれた山口県では、橋の建設も相次ぎました。昭和40年に青海大橋が完成、上関大橋や笠戸大橋の工事が順調に進み、本州と九州を結ぶ関門橋建設にもいよいよ着工するとしています。また県下最大の離島であった周防大島と本土をつなぐ大島大橋も調査が最終段階を迎え、本格的な設計に入る予定であるとされています。

これらの記事からは、高度経済成長期の勢いが伝わってきます。

* この時期の架橋については、
「青海大橋のあらまし」（リーフレット昭和40-22）、
「上関大橋」（同昭和44-7）、
「笠戸大橋」（同昭和45-30）、
「関門橋・関門自動車道」（同昭和44-12）、
「大島大橋」（同昭和47-40）などの資料があります。